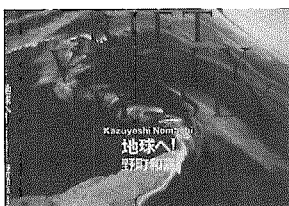


「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

野町和嘉著 地球へ/
RIFT VALLEY ODYS-
SEY 東京 講談社
1992年



遠くへ越すことになった友だちから、記念にと風景写真をもらったことがある。これは自分の撮った写真だから、この写真を見れば撮ったときの自分と同じ景色を同じ視線で見ることができる、それもまたいいでしょ、と言うのである。なるほど、と嬉しくなり、以来、どんな写真を見るときでも写し手の「視線」を意識するようになった。

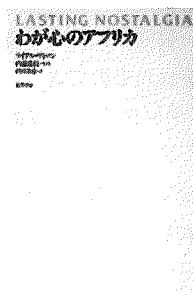
『地球へ!』は、アフリカ大陸北東部に位置するリフトバレーの写真集である。この本を開き、写真家である野町氏と視線を重ね合わせているときの私は、普段と少し違う感覚を獲得しているように思う。「不気味なピンク色をし、異様な臭気が立ち昇る苛性ソーダの湖」を見ても「絶え間ない部族抗争に備えて素裸の腰に弾帯を着けた男たち」や「難民キャンプで出会った生命が透けて見えるような子供たち」を見ても、その美しさと力に息を呑み、感嘆していることに気づくのである。

アフリカの苛酷な自然や貧困、部族抗争を題材に取り上げてはいても、それを説教がましく紹介してみせようといった姿勢はここではまったく感じられない。スーザン・ソンググが言うように、「たとえどんなものであれ、それを写真に撮ろうとする人はそこに何か美しさを見い出そうとしている」ものなのであろうか。リフトバレーと呼ばれる荒涼とした半砂漠地帯やそこに生きる人々も、この写真集の中では野町氏のフレームに切り取られ、研ぎ澄まされた美しさを纏ってあら

われてくる。

雨が降らなくなっただけでたちまち死の淵に立たされてしまう徹底して乾いた世界。その極限の世界に息づく綱渡りの生が「きらめいて見えた」(巻末解説より)という野町氏の視線を、本書に収められた96葉の写真の一つ一つは鮮やかに再現し、彼の発見した輝きを雄弁に物語ることに成功している。(津田みわ)

ライアル・ワトソン著 内
藤忠行写真 内田美恵訳
わが心のアフリカ 東京
筑摩書房 1992年 203p.



本書は世界的なベストセラー「スーパーネイチャー」の著者が自らの故郷アフリカについて書き綴ったエッセイ集である。著者は喜望峰に最初に植民したオランダ人の血をひく「アフリカ人」であり、アフリカの大自然の中で育ち、その大地に生きる人々、動物や植物からさまざまなことを学んだ。

始めに語られるのは著者が6歳の時に亡くなった祖父の葬儀の思い出である。自然を愛し鳥葬されるのを望んでいた祖父であったが、法律に反すると行政長官の反対にあってしまう。そこで、気丈な祖母は葬式の前夜密かに亡骸を運び出し、棺には石と新聞紙を詰めておいた。祖母は数カ月のちに孫である著者に「じいさんはね……そこらじゅうにいるってことなの」と満足げに語ったということである。

本書ではこのような著者の古き佳き時代のアフリカへの想いが科学者らしい淡々とした筆致で語られる。古き佳き時代とは著者のいう「恐るべき(身に過ぎた)

武器（科学と医学の秘密を解く鍵）を手にして世界に放たれた、未だ幼年期の人類が……悪さを始める」前のアフリカである。そのことをさらに読者に印象づけるのが本書に収録された写真群で、著者の内面にあるアフリカ像をみごとに写し出すことに成功している。したがって本書はエッセイ集であると同時に写真集であり、その両者が違和感なく駆け合った贅沢な出版物といえる。パラパラとめくって目に留まった写真のあたりを読むだけでも読者は佳きアフリカの一端に触れることができるにちがいない。（鈴木陽子）

パトリック・メラン著 下田文子監訳 アフリカの日常生活 東京 新評論 1992年 316p.



本書はアフリカの日常生活を一般向けに紹介するために書かれたものである。原題は「ブラックアフリカの日常生活：フランス語で書かれたアフリカ文学から」で、原著は1977年に出版されており、著者はフランス人である。

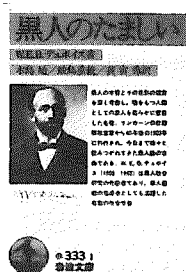
本書はともすれば特殊な面だけが強調されて紹介されがちなアフリカの現実を、ふつうの人々の日常生活に焦点をあてることによってありのままに伝えようとしている。そのために著者がとった方法は、著者自身の文章の合間にアフリカ人によって書かれた文章を頻繁に挿入し、それによって「不十分な解釈を加えることを避けてアフリカ人自身に判断を委ね」というものであった。引用されている文章は小説や昔話の中の登場人物の台詞が多く、これが退屈になりがちな解説に生き生きとしたアフリカの息吹を加えている。著者はこの独自の方法を使って、アフリカの自然、学校生活、結婚生活、娯楽、病気や死など日常生活の諸側面をわかりやすく描いている。

たとえば学校に関する章で著者は、教育のアフリカ化の問題にふれ、次のような文章を引用する。「『……王族の最高位にある女として、私は外国人が建てた学校を好みません。憎んでさえいます。だがそれでもなお、子どもたちを学校へやらねばなるまい、と考えて

いるのです』。抵抗を感じつつも教育の必要性からそれにヨーロッパから持ち込まれた教育内容や制度に従わなければならないという現実、そしてこの現実に直面したときのアフリカ人の苦悩が、この引用によって見事に表現されている。

原著の出版が15年余り前なので、1990年代のアフリカの現実からはややずれる記述もところどころ見られる。しかし、アフリカ紹介の本がともすれば個人の体験記や無味乾燥な概説書となりがちななかで、アフリカ人が語った現実を尊重した本書のアプローチは、現在においても新鮮な印象を与える。（高根 務）

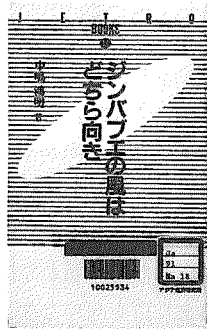
W・E・B・デュボイス著 木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳 黒人のたましい 東京 岩波書店(岩波文庫) 1992年 429p.



本書はパン・アフリカニズム運動の父と言われるデュボイスの主著の一冊で現在では

黒人論の古典となっている。黒人の血をひく著者は19世紀末のアメリカで最も早い時期に高等教育（ハーバード大学）を受け、その後、アトランタ大学に奉職した。この時期、黒人の政治権力、市民権を否定し、黒人に高等教育は必要でないと主張するB・T・ワシントンに対し激しい批判を行ない、黒人も白人と同様、魂をもった人間であることを主張し、1903年本書を刊行した。さらにこの主張に基づき「ナイアガラ運動」「全国黒人向上協会」を結成し社会運動に踏み出したため大学を追われ、以後協会の機関誌*The Crisis*の編集長として黒人の地位向上のための論陣をはった。そしてその一環として1919年のパン・アフリカニスト会議（パリ）を主催し、解放奴隷の祖国復帰運動を展開した。第2次世界大戦後のマッカーシズムの中でデュボイスの思想は危険視され、57年のガーナの独立式典に招かれながら旅券が発給されず出席を断念した。のち、63年にデュボイスはガーナ市民となり、95歳で永眠した時にはガーナで国葬が行なわれた。本書は1965年に未来社から出版されたものの改訂版である。（林 晃史）

中嶋鴻明著 ジンバブエの
風はどちら向き (JETRO
Books 11) 東京 日本貿
易振興会 1992年 221p.



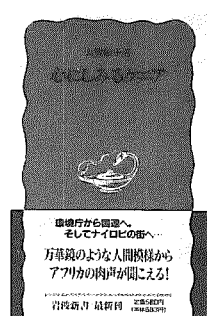
実に楽しい本である。一つの国を誰にでも分かりやすく、しかも小冊子で紹介することは並大抵のことではない。まずその地に長く滞在し、その間、自分の興味のあることばかりでなく、全体を把握しようという意志を絶えずもち続けなければこのような本は書けない。この本の著者はその条件をかねそなえた稀有な人と言って良い。

その上、対象となっているジンバブエがまた複雑な性格——簡単に言えば言行不一致——をもっているからなおさらである。このことは本書の題が象徴的に示している。つまり、マルクス・レーニン主義を掲げながら、独立以来10年間、実際やってきたことはきわめて資本主義的なものであったという。この問題は第1部で提示され、第4部の国際経済の中のジンバブエで答えられている。

しかし本書はこのような「むずかしい」話題ばかりではない。第2部の「ジンバブエ人の生活」ではエピソードを交えかれらの生活がいきいきと描写され、また第3部の「歴史と民族」では、単に歴史だけではなくこの民族の文学、彫刻、音楽、女性の現状が幅広く描かれ、第4部では周辺国や日本との関係にも言及されジンバブエの全体像が浮き上るといふ仕組みになっている。

この国を訪問する人に一読をすすめたい。(林 見史)

大賀敏子著 心にしみるケ
ニア 東京 岩波書店(岩
波新書) 1992年 222p.



ナイロビに本部をもつ国連
環境計画 (UNEP) に勤務し
た著者の2年間のケニア生活
——本書はその間に著者が接

したケニアの庶民とのエピソードをまとめたケニア体験記である。

子供のときからナイロビに憧れていたという著者だけに、多くの在住外国人とちがい、自ら求めてアフリカ人の中にとびこんでいった。たくさんのふつうのアフリカ人と行き来し、マタトゥに乗り回り、クンビクンビ(羽織)をおかずにするというから、頼もしい。そして予感どおりますますケニアが好きになる。

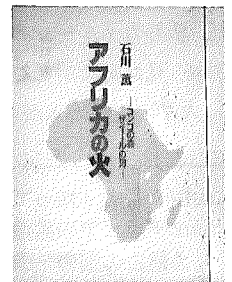
ケニアに惹かれるという人は多いが、その理由が必ずしもうまくいい当てられていないようだ。この著者によると、その理由はケニア社会の度量の広さ、懐の深さである。それは「分かち合い」の精神からくる人間関係の柔軟さであり、一面、「いい加減さ」でもあるのだが、それがまたケニア社会の強さでもあるという。そこでは、「よそゆき」の顔は必要ない。だから管理社会から来た日本人でも自然にふるまえる。人間も自然の一部なのだ。

著者の交友エピソードは親しく交わったもののみが語れるケニア人のいろいろな面を見せてくれる——失業者の生活、「自営」の実際、アフリカ人同胞意識、都会へのあこがれ、一夫多妻、言語生活……等々、そして生活苦も。「心にしみる」ほど惚れこんだ分だけ、著書の観察は細かい。

本書には著者の本業の環境問題は出てこないが、ケニアがどんな課題を抱えているのか、一章くらい触れてくれてよかったと思う。

ところどころ、小さなこみ記事がケニアのプロフィールを紹介していて、読みやすい。(丹埜靖子)

石川薫著 アフリカの火
コンゴの森ザイルの川
東京 学生社 1992年
212p.



本書は外交官である著者が
ザイルのキンシャサに赴任
していた時期の外交官家族の
生活を随想風に描いたもので

ある。元々が雑誌に連載していたものを取りまとめ、夫人と子供たちが書いた文章も加えたものであり、一つ一つの項目ごとにまとまっており読みやすい。

随所に著者の「アフリカへの思い」が表われている。夫人が体調を崩し静養のためにアフリカを離れるという、いわば家族の危機という状況があっても、また著者自身が帰国した時に8キロも体重が減少し疲れきっていても、アフリカへの思いは断ち難いようである。そのアフリカへの思いは、著者が記しているように「燃えたぎる情熱とどこか冷めた目とが心とともに宿るように」なった時に帰国の決心をしたとおり、著者はこれからは内に情熱を秘めて冷静にアフリカを見てゆくことになるだろう。

赤道直下の33度のキンシャサに、零下15度のジュネーブから赴任するという場面から本書は始まる。キンシャサでの外交官家族の日常生活、旅行や、市場での食料調達の様子が描かれる。電気、水道、医療、何をしてもなかなかうまくゆかない。そんな中でも子供たちはのびのびと生活している。現地の人々もゆったりとした時間の中で苦しい暮らしとはいえ頑張っている。

本書を読んでいて面白いのは、日本の援助、外交政策に対する揶揄がいろいろと出てくることであろう。対応が素早い欧米諸国に比べ日本の対応の遅さを批判したりしている部分など、現職の外交官が書いているところが痛快である。

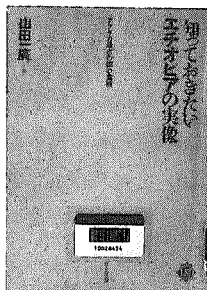
巻末には、夫人と子供がザイルでの生活のことを記している。この部分は大人の男性の書いた部分と異なり生活と密着していて読む者は自分の生活と比べさせられる。

書名は、著者がキンシャサに赴任する時に、夜間サハラあるいはサヘル地域に見えた炎からつけられている。私もカメルーンのドゥアラからパリへ向かう時に窓から見た覚えがあるが、一体あれは何だったのだろうか。人々の生活の火があのように見えるものだろうか。

(井村 進)

山田一廣著 知っておきたいエチオピアの実像 アフリカ最古の国の素顔 東京 ぼるぶ出版 1992年
iii, 207p.

本書は「エチオピアについてあらゆる角度から光をあて



て、その素顔を浮かび上がらせるとともに、飢餓はなぜ起きたのか、その原因も探してみる」(「はじめに」iiiページ)という目的をもって書かれており、その内容がきわめて多岐にわたっていることと、中学生でも理解できるほど表現がやさしいという点からしても、エチオピアに関する入門書として格好のものであろう。

また、「エチオピアは飢餓プラス貧困というイメージが強いので、私たちはこれまで、この国の他の面にはあまり目を向けようとはしませんでした、エチオピアの実像は、決して飢餓に代表されることだけではありません」(iiiページ)という著者のことばも読者の共感を呼ぶに違いない。

しかし、幅広い読者を想定したためか、あるいは入門書というものの宿命か、著者が一般の日本人とは違って飢餓や貧困だけでない「他の面」にも目を向けようとした著者自身の動機が、いまひとつ曖昧であり、そのためあって、記述が平板になったのは惜しまれる。

たとえば著者は、革命政府のもとで農地改革が行なわれたにもかかわらず、農民の意向を無視して収穫物を安い価格で買い上げる政策をとったため、農民の生産意欲が減退し慢性的な飢えが存続することになったと述べている(171～172ページ)。この説明では、農民が農産物の市場向け生産を行なっていることが前提とされているが、著者が自ら指摘するように「農地改革は行なわれたものの、(中略)大部分は農地改革前と同じ自給経済どまりであった」(172ページ)のが事実とすれば、価格政策が食糧不足や貧困の原因などとは言えないであろう。

このような矛盾が起きるのは、自給経済とは何であり、農地改革前の封建的土地制度のもとでも自給経済であったと言えるのか否か、などというように、問題を深くかつ具体的に考察するのに必要な内在的動機が著者に欠けているためではないか。それを端的に示すのが、「知っておきたいエチオピアの実像」という本書のタイトルである。つまり、本書には「著者が知っておくべきと考えたこと」は書かれているにしても、それが「なぜ、一般読者にとっても知っておく必要がある」と著者が考えたのかは評者に伝わってこないのである。

(細見真也)